vol.0 2024 Mar 1

Travelogue
Transfield Studio
Rick Yamakawa
Yuko Takeda
Design
Tezzo Suzuki + Harumichi Nakamura

Transfield Studioのおたより

O TA YO RI

今年のTransfield Studioは、作品発表だけでなく各地でのフィールドワークを通じた思考や経験を有料の「おたより」として発信することにしました。五月雨な経験がツアーへ変形していく過程や、色々な場所の様子を楽しんでもらえたら嬉しいです。
購読によるTransfield Studioへのサポートはこちらをご覧ください。
www.transfieldstudio.com/OTAYORI

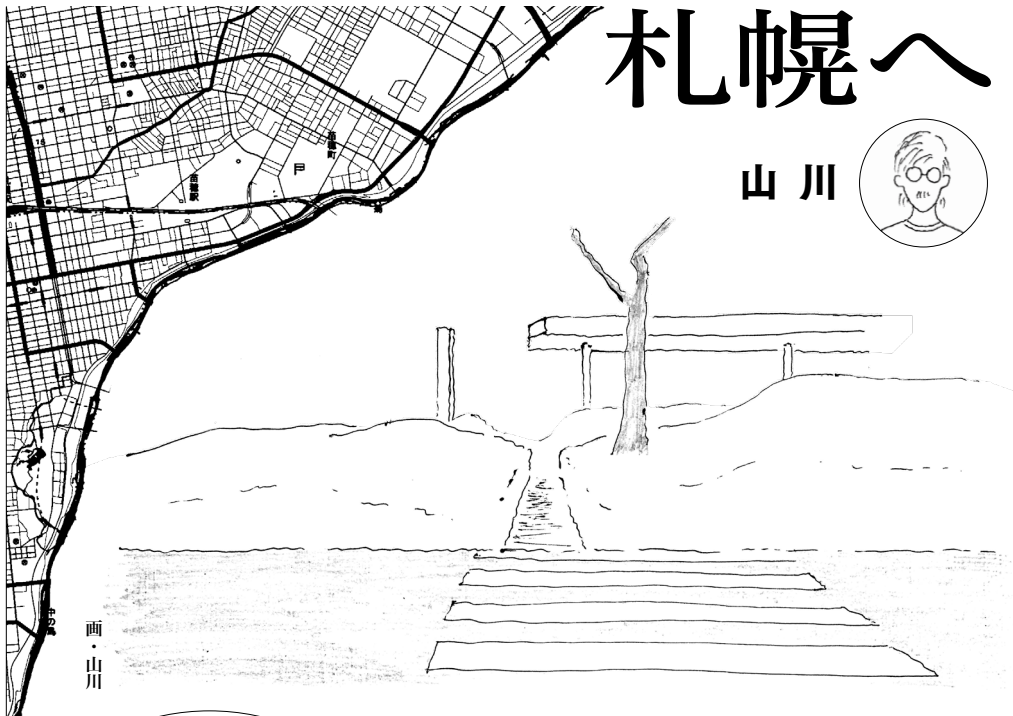
◉ Transfield Studio 今後の活動予定

◉3月中旬 長野県上田市でフィールドワーク（山川）

◉4月中旬〜6月中旬 寶蔵巌国際芸術村（台北）でリサーチレジデンス（山川・武田）

札幌へ

山川



札幌に一週間滞在してきました。

両親に連れられて、夏の知床や冬のニセコへ行ったことはあるものの、真冬の札幌市街にずっといたことはありません。

すすき野でバスを降りると、歩道は雪がなく、車道は雪で盛り上がっています。轍と起伏で車が上下に揺れながら走る。道を横切るときだけ歩道より高い雪の上を歩く。大きな道沿いでは歩道にも車道にも雪がない。街のはずれのホステルに向かううち、歩道も車道も雪が積もっていて、人の声も聞こえず、歩いている人の雪を踏みしめる音しか聞こえない。その音も、自分の足元から聞こえてくる音から想像していただけなのかもしれません。吸音されてるな〜、と感心しました。

❄

ホステルのあったあたり、

街の外側では歩道と車道の間には自分の身長よりも高い雪の壁が続いていて、横断歩道のあるところだけ雪が切れています。右見て左見て右見て、という子どものときの教えを忠実に守ります。車からも、角を曲がった先はたぶん見えていない。平たく、碁盤の目のように広がる札幌がどこまで続いているのか、雪の壁の連なりでますます分からなくなりました。田畑のあるような郊外で、真っ白な広がりを見てそのスケールアウトにびっくりする、という自分は想像していたものの、これだけのメガシティで寄る辺ない気持ちになるとは思っていませんでした。

❄

同程度の緯度にある都市は

世界にはいくつもあるものの、札幌の人口と街の規模は特異なようです。札幌を訪れてみると、この冬の厳しさに向き合い続ける社会と生活のことについて考えますし、しかしそもそもの開拓や入植が権力・暴力の行使によって起きたことも考えこまずにいられません。Transfield Studioのフィールドワークと作品づくりは、近代以降の大都市の成り立ちからいつも考えます。気候や地形といった所与の環境に対して、どのように人が人の集まりを成り立たせるための計画を考え、実行してきたのか。たとえば埋立地が必要なのは、元々あった平野部では足らない、という端的な理由が一つあるわけです。逆に、えらく広い平野なのに近世まで大きな人の集まりが作られてこなかった土地があるとしたら、それには理由があって。社会的な要因ももちろんですが、単に住みづらい土地だったりする。関東平野がかつては湿原で、21世紀の今もなお河川の治水が重要な課題として存在するのはそういうことです。大勢の人が集まるには平らで広い土地が必要ですが、平らで広い土地に集まり続けるのは簡単ではない。こうしたジレンマが、足下にはいつも横たわっていると感じられます。

土地、という言葉には所与の自然環境も人間の行いも一緒くたに考えられるニュアンスがあって、天災と人災を一緒くたにしてしまう無責任さには陥らないよう、一方で自然環境の不安定さを差し引かず、物質として現れている都市の姿から人の集まりについて考えていきたいのです。

❄

おいしいご飯をたくさん食べて、

雪の中を歩き回って、人と話して、それでもこうしたことを考えてしまう日々でした。ある土地の話は、その土地の話であり、また違う土地の話でもある。号を追うごとに、大事な交差が見えてきたらいいなと思っています。

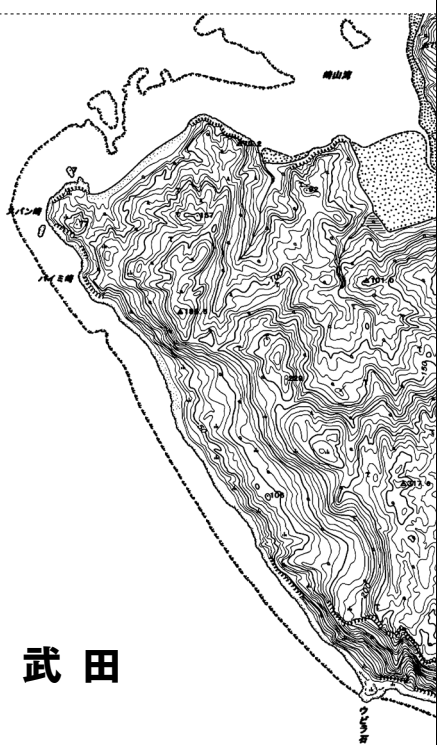
今号のメモ

• 札幌国際芸術祭で見たあべ弘士の展示がすばらしかった。北極探検のスケッチブックの複写、記録すると同時に記述の発明が全ページで起きていて驚いた。アーティストの友人と一緒に見て、なんか二人とも（爽やかに）傷ついた。

• 三重県熊野市に帰省してました。古道を一部つぶして国道にしたことは、やむにやまれなかったことでもある、と厳しい地形を見るたび思う。でも、昔も今もそこに道を通すしかないことがある、というときどうするか。（山川）

西表島へ

武田



今年はトランスフィールドスタンダが

いくつかの都市に訪れる予定があるということで、そこでウロウロする様子をそのままお届けしようという試みである。レジデンスや作品発表という目的はあるものの、これもひとつの旅である。私は学生時代、いわゆるバックパッカー旅を何度かしていて、王道のインドから中国、ヨーロッパなどを訪れた。この仕事を始めてからも、隙をみては、少林寺の僧侶の日頃の訓練により凹んだ石畳を見に少林寺へ行ったり（ついでに、三国志に出てくるあの洛陽にも）、チベットからカトマンズまで車で7日間かけてヒマラヤ山脈越えをしたり、様々な旅を楽しんだ。今でも小話として披露するエピソードがいくつもあり（いっかこの誌面でもお届けしたいものである）、思い出深い経験は今でも時折頭に浮かぶ。みなさん誰しもそのような経験はあるのではないかと思う。これからの我々の旅も、大きな話から些細なことまで徒然に記し、みなさんにお届けすることで、ある記録として蓄積されていくのを大変楽しみにしている。

✈

山川くんが札幌から帰ってきた

翌々週、私は沖縄の西表島に行った。フェスティバルのコーディネーターをしていた時代から、その年度のフェスティバルが閉幕すると、長めの休みをもらってアジアのどこかでささやかなバカンスかアドベンチャーをするというのを続けていたところ、それが習性になってしまい、フリーランス1年目を終えようとしている今年も、自然と旅の計画をしていたのだった。西表島を選んだ理由は、「ピンときたから」という他ないが、地図で場所を見てみたところ想像の数倍くらい南西にあって、九州なんかよりも台湾の方が断然近いのに驚いた。あとイリオモテジマ・イリオモテヤマネコ・マングローブ、というのは日本の地理（だったと思う）の授業で一番最初に学ぶ範囲（だったと思う）のためか、妙に記憶に残っていて、これは行ってみるしかなねえな！ということで決定したのだった。

✈

西表島は、沖縄本島から

西南方向に435km（＝東京から京都くらいの距離）に位置し、島自体は外周130km（うち車で走れるのは55km）、全て車で回れば2－3時間で一周できる計算だ。島の90%は自然林で覆われていて、人間が住むのは10%の土地だ。日本で5番目に「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」として世界自然遺産に登録され、これをもって日本の候補地が全て登録となった。つまりこれ以降日本から世界自然遺産に登録される場所はなく、これが西表島が「日本最後の秘境」と呼ばれる所以となっている。島にコンビニは無く、唯一フェリーが就航している石垣島にはファミリーマートしかないため、西表島から一番近いセブンは台湾のセブンだという。住宅や飲食店があるエリアは島の海沿いの平地を中心としたエリアに限られ、あるエリアから別のエリアまでは両側が緑に覆われた道をひたすら車で走る必要がある。県道は自ずとに島の外周をなぞるように敷かれていて、先述の通りそれも途中で途切れている。人間が島に暮らす時は、やっぱり海沿いの平地から始まるのだ。先述の通り、島の中心部は手付かずのジャングルが広がる。

✈

西表島のスター、イリオモテヤマネコ

についても少々。なぜこんなに重要なのかというと、固有種が非常に多く生物多様性に富んだ島の生態系において、そのピラミッドの頂点にあるのがこのイリオモテヤマネコなのだという。実は泳ぎも得意で、他の地域のヤマネコよりも遥かに雑食でカエルも食べるらしい。イリオモテヤマネコが絶滅すると、島の食物連鎖のピラミッドが崩れ、生態系全体の様相が全く変わってしまうことになる。世界でもこの島にしか生息しない固有種であるというだけでなく、その存在が島全体の動植物のバランスを保つことにも繋がっている、だから守らなくてはいけないのだそうだ。イリオモテヤマネコが雑食であることからもわかるように、彼らの行動範囲は陸も海も含む。つまりそれは人間が暮らしている平地で、そこには当然様々な危険が伴う。「ロードキル」と呼ばれる、イリオモテヤマネコが車に引かれて死んでしまうケースが年に数件あり、それを防ぐために県道には速度減速や、ヤマネコへの注意を促す看板がいくつもあった。さらに、道路の下にヤマネコ専用の小さなトンネルが島内に123基ほどあり、そこを通って森から海に抜けられるよう対策しているそうだ。そのほか、ヤマネコの伝染病を防ぐために、島民の飼い猫にはGPSを装着したり、飼育できる頭数の制限をするなど、イリオモテヤマネコを守るために数々の方策があらゆるところでなされていた。人間と動物・自然が、少ない平地や海沿いをシェアしながら〝生息〟しているのが西表島だった。

✈

マングローブも見た。

淡水と海水が混じる「汽水域」と呼ばれる場所、つまり「川と海の間」にだけ生息する植物の総称である。なぜそんなところに生息しているのかというと、元々マングローブは生存競争に非常に弱く森の中では生き残ることができず、次第に山から海側へと追いやられたのだそうだ。とうとう海際まで辿り着き、そこで植物にとっては天敵とも言える塩分を葉から排出する機能を得ていった。近くでよく見ると、約20枚に1枚くらいの割合で黄色い葉があることがわかる。舐めたらめちゃくちゃしょっぱいらしい。他の植物には無い特殊な機能を身につけ、川と海の間のエリアはマングローブの独占市場となった。西表島には7種のマングローブが生息しているといい、そのマングローブがあることで、魚が集まり、その魚を食べるために鳥が集まる。マングローブが「命のゆりかご」と呼ばれるのはそのような所以だ。ここにも、海と陸と、その間で繰り広げられる生物のピラミッドが関係しているのだ。

✈

人間と土地の関係について考える

ことを創作やリサーチの主としてきた我々であるが、あまりにも根本であるが故に、いったいどこから手をつけて良いのやらと途方にくれそうになる時がある。これからいくつかの島や半島を訪れるが、そこで繰り広げられている人間や動物や植物の様相の根本にあるものの〝根本さ具合〟をいちいち噛み締めて、すげえなとかやばいなとか、驚いていきたいなと思う。

Transfield Studioとは……アーティストの山川陸、パフォーミングアーツプロデューサーの武田侑子によるユニット。ツアー形式の作品を通じて「どうすれば集まった我々は共にいられるのか」を考え続けてる。今年も国内外各地をうろうろしてきます。

HP www.transfieldstudio.com
@transfieldstudio
@Transfieldstd

デザイナーからひとこと 私も先月札幌へ。飲みすぎて10年に一度規模の二日酔いに。しかし札幌は防衛的な建築デザインのせいか、大時代的な都市計画のせいか、どこか古風でエキゾチックな都市に見え素敵でした。先日前橋にも行きまして、こちらは高崎との競争のなか商人たちが都市整備を支えたらしいですが、今は眠れる都市という印象。県都もさまざまですわね。**（鈴木）**

◉今週の参考図書：西村幸夫『県都物語』（有斐閣）